

## 日本語版に寄せて

この原稿を書いていると、書齋の窓越しに、ハンノキの乾いた葉が風に鳴る音が聞こえてくる。ラズベリーの一種のサーモンベリーやヤナギも黄金色に色づき始めている。じきに、深紅に染まったヒロハカエデと目も覚めるような色の競演をくり広げ、秋のひとつときを楽しませてくれるだろう。しかし、こうした艶やかな装いに目を奪われて、森のもう一つの営みを忘れそうになる。森の開けた林床では、新しい世代を担う種子が土壌シードバンク（埋土種子集団）を生み出しているのだ。回転する翼や綿毛の助けを借りて漂う種子もあれば、動物の毛や人のズボンのすそに付いて運んでもらう種子もある。こうした種子がシードバンクを満たしてくれるおかげで、私たちが愛おしいと思う野山の風景が再生されるのだ。

種子はないがしろにされがちだが、かけがえのないものである。私が種子に魅せられているのは種子のそうしたところだ。私たちは食品や香辛料はいうまでもなく、衣類、生物燃料、医薬品など生活に欠かせないありとあらゆるものを種子に頼っているのにもかかわらず、どうしてこれほど種子に無

頓着でいられるのだろうか？ ちょっと足を止めて、種子に耳を傾けさえすれば、自然についてだけでなく、自然と私たちの関係についても面白い話をしてくれる。本書の目的はこうした種子の話を紹介することである。私は本書を書くうちに好奇心がさらに増したが、読者の皆さんも本書を読むことで好奇心を掻き立てられることを願っている。

しかし、私が種子に魅せられているのにはもう一つ理由がある。私はアメリカ西海岸沿いの島に住んでいて、そこには小高い丘や浜辺、森、野原、湖、河川がある。しかし、島嶼の例に漏れず空間が狭いので、ここでは小さなものに価値があるのだ。島に暮らす人々は身近なことに関心を持ち、大事にする。海に囲まれた島という地理的条件は視野を狭めるかもしれないが、その一方で、視野に深みを与えてくれる。島国の日本に暮らすのも同じなのではないかと思う。本書が日本の土壌に根を下ろす機会に恵まれたことをたいへん嬉しく思っている。本書のテーマは煎じ詰めれば、小さなものに価値があるという島国の人なら誰でも共感できることだからだ。

二〇一七年一〇月 サンファン島にて

ソーア・ハンソン